HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	詩人ネスメーロフのウラジオストク生活と亡命
Author(s)	望月, 恒子
Citation	境界研究, 1, 121-131
Issue Date	2014-03-01
DOI	https://doi.org/10.14943/jbr.s.121
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61337
Type	departmental bulletin paper
File Information	09MochizukiTsuneko.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『境界研究』特別号（2013）pp. 121-131

詩人ネスメーロフのウラジオストク生活と亡命

望月 恒子

はじめに

十月革命が起きてから1920年代前半にかけて、約200万人ともいわれる多数の人々がロシアを離れた(1)。彼らによって世界各地に作られたロシア人コミュニティでは、ロシア語の新聞や雑誌が発行され、独自の文学活動が行われた。ソヴィエト国内の文学と並んで、亡命者たちによる在外文学が発達したことは、20世紀ロシア文学の大きな特徴である。

1920年代から1940年代前半まで存続した亡命ロシア文学の中では、ベルリン、パリを中心としてヨーロッパで展開した文学がよく知られている。中国のハルビンや上海にも多くの亡命者が集まり、やはり盛んに出版・文学活動を行ったのだが、ヨーロッパの亡命ロシア文学と比較すると、従来は知られることが少なかった。しかし、ソ連邦の崩壊以後は研究が進められ、「在外ロシアの東方の枝」として存在が認められるようになった。

特にハルビンには、中東鉄道の拠点としてロシアが建設した町であるという事情もあって、亡命者が集中した。ハルビンを代表する文学者としては、活発に詩や小説を発表したアルセーニイ・ネスメーロフの名を挙げるのが妥当であろう。ソ連時代から在外文学に強い関心を示してきたエヴゲーニイ・ヴィトコフスキーらの努力で、詩を中心とする作品集『モスクワもなくロシアもなく』が、作家の死後45年を経た1990年にモスクワで出版された(2)。そして2006年には二巻作品集が出版された。散逸した作品も多いと思われるが、ネスメーロフの作品を知り、彼を通じてハルビン文学に触れることができる時が、今ようやく訪れている。

ネスメーロフは亡命後21年間住んだハルビンで文学的才能を開花させたのだが、本稿は彼の文学を論じることを目的とするものではない。彼のハルビン到着以前のこと、すなわちウラジオストク時代の仕事のこと、そしてハルビンを目指してウラジオストクを脱出したときのことを、彼自身の回想や作品をもとに探ってみたい。これらは、ネスメーロフ研

(1) 十月革命後のロシアからの難民・亡命者の数については、諸説がある。ソ連の公式見解では約200万人とされ、各種資料でこの数字が用いられた（たとえば、Большая советская энциклопедия. Третье издание. М., 1978. の «Эмиграция белая» の項目説明）。現在では、さまざまな理由からもっと少なく見積もる研究者もいる。たとえばセルゲイ・イッポリートフは、亡命者数が100万人以下であった可能性を示唆している。*Ипполитов С. С.* Российская эмиграция и Европа: несостоявшийся альянс. М., 2004. С. 22.

(2) *Арсений Несмелов*. Без Москвы, без России. М., 1990; *Арсений Несмелов*. Собрание сочинений. Т. 1, Т. 2. Владивосток. 2006.

究やハルビン文学研究にとって重要であるが、それに留まらず、十月革命後の極東の複雑な情勢下における個人の生き方や、その時代の国境地帯の現実を知る上でも興味深いと思われる。

1. ウラジオストクにて（1920—1922年）

作家ネスメーロフ(1889–1945)はモスクワの生まれで、本名をアルセーニイ・イワノヴィチ・ミトロポリスキーといった。モスクワの陸軍幼年学校に入学したが、後にニージニー・ノヴゴロドの陸軍幼年学校に転じ、同校を卒業した。第一次世界大戦に参加して、前線での戦闘や塹壕生活を体験した。この戦争経験は、ネスメーロフの作品の重要なテーマのひとつとなっている。少尉という低い階級ではあったが軍の将校であった彼は、十月革命が勃発すると反ボリシェヴィキ勢力の側につき、西シベリアのオムスクでコルチャーク軍に身を投じた。1920年1月にコルチャーク政権が崩壊すると、軍の残党とともに東へ退却した。真冬のシベリアを東進する、非常に辛い行軍の末にウラジオストクに到着したのは、1920年の春先のことである。

ウラジオストクでは、十月革命後に一時ソヴィエト政権が成立したが、日本軍や連合軍のシベリア出兵、チェコ軍団の反乱など複雑な動きがあって、市を統治する権力は何度も変わった。1920年1月にボリシェヴィキが再び権力を奪取したので、ミトロポリスキーが到着したとき、市はボリシェヴィキ体制下にあった。ところが約二週間後の1920年4月に、日本軍が「革命軍武装解除」と呼ばれる作戦を行ってボリシェヴィキ勢力を鎮圧した。この政変は、「中東鉄道警備隊書記」の身分の偽パスポートを所持して、市中に身を潜めていた元白軍将校ミトロポリスキーにとって、望ましい変化であったことは間違いない。「警備隊書記はもちろん喜んだ。彼は軍帽の表地と裏地の間から、『オムスク市司令官付き副官、K中尉』名義のパスポートを引っ張り出した」(643)[(3)]と、作家は回想記『自分のこと、ウラジオストクのこと』に記している。内戦時代、次々に市の権力が移り変わり、情勢が定まらない中で、偽造パスポートを複数用意して、そのときどきの状況で生き延びようとしていたことがうかがえる。

政変によって身の危険が去ったと感じたミトロポリスキーは、ここで新しい方向へと生き方を転ずる。詩人ネスメーロフが誕生するのである。陸軍幼年学校卒の彼は、第一次世界大戦に出征して以来ずっと職業軍人であったが、実は革命前のモスクワで、詩や戦争ル

(3) ネスメーロフの作品の引用は、*Несмелов*. Собрание сочинений. Т. 2により、( )内に頁数を示す。ネスメーロフのウラジオストク時代に関する回想記『自分のこと、ウラジオストクのこと (О себе и о Владивостоке)』は、プラハで発行されていたロシア語雑誌『自由なシベリア』の編集者イワン・ヤクーシェフ(1882–1935)宛ての書簡の形で書かれた。『自由なシベリア』10号に発表予定であったが、雑誌が発行されなかったため、原稿はヤクーシェフの手元に残った。1930–31年にハルビンで書かれたと推察される。1995年、ウラジオストクで復刊した『ルベーシュ』2号に掲載された。

ポルタージュを発表して本にまとめたことがあった。ウラジオストク到着後、当地の新聞に詩がたくさん載っているのを見て、自分も詩を書いて投稿してみようと思い立つ。それが彼に思いがけない新しい仕事をもたらすのだが、その経緯を彼の回想記から引用してみよう。

僕は詩を書き終えて、アルセーニイと自分の名前を書いた。

でも、何と続けようか？ なぜか記憶の中に、チュメニの近くで戦死した友人の顔が浮かんだ。

「せめて僕の詩の中で、あいつを生きさせよう！」

そこでネスメーロフと署名した。

三日後に——非常に気に入られたので、日曜版さえ待たずに——詩は掲載された。その新聞を手に、顔には幸福の笑みを浮かべて、僕は金角湾を見下ろす小公園に座っていた。公園の名前は忘れたが、東方を望む双頭の鷲の記念碑が建っているところだ。「ひとたびロシア国旗が掲げられたところでは、旗は下ろされてはならぬ」というニコライ一世の言葉が、花崗岩にブロンズで刻まれている[4]。

沿海州の4月には珍しい、よく晴れた日だった。眼下の海は暖かい青色に輝き、海面では二頭のマッコウクジラが、巨大な黒い背を見え隠れさせて元気に泳いでいた。詩の成功も暖かさもうれしくて、私はほほえんでいた。同じベンチに日本人[5]が座っていた。

「あのう」と、彼は急に話しかけてきた。「きっと、とても面白いことが新聞に載ってるんでしょう？　さっきから同じところを読んで、笑ってらっしゃるじゃありませんか」

「ええ！」と僕は誇らしげに答えた。「とても面白いものです！　僕の詩なんですよ、ほら」

日本人は私から新聞を受けとると、黒い目を瞬かせて言った。「おお！ なんですって。なるほど、非常に面白い。あなたが新聞で働いてらっしゃることは、すばらしい。えーと……」

彼は札入れを取り出し、中を探って名刺を見つけると、それを差し出した。私は読んだ。

「リョオノスキ・イズミ、日刊新聞『ウラジオ・ニッポオ』発行人兼編集者」[6]

僕も自己紹介したが、もちろん名刺は出さなかった。名刺など持っているはずもない……。日本人はこう言った。

「もうじき『浦潮日報』のロシア語版を発行します。私の助手になりたくありませんか。我々は人を探してるんです」

もちろん、僕はなりたかった。

日本語新聞の付録のロシア語紙は二日後に発行され、日本の占領軍の半官報となった。最初の二週間は僕がひとりで、編集者・記者・校正係・発行人を兼ねていたが、その後、事業

(4) 1897年にウラジオストクに建立されたネヴェリスコイ提督記念碑は、大型のオベリスクで、上部には地球儀の上にロシア帝国の国章である双頭の鷲の像が羽を広げ、台座部分の銘板には皇帝ニコライ一世がネヴェリスコイに関して発した勅語の一節が刻まれていた。

(5) 1930–31年頃に書かれたこの文では、「日本人」は японец, японцы 、「日本の」という形容詞は японский と、普通のロシア語で表記されている。満州国成立後のハルビンでネスメーロフは、「日本人」「日本の」を ниппонцы, ниппонский と表記するようになった。1938年に雑誌『アジアの光』に発表された短編小説『タカハシ中尉』などに、その例が見られる。

(6) 原文：Реоносуки Идзуми. Редактор-издатель ежедневной газеты «Владио-Ниппо»

> を拡大するように命じられた。僕は知り合った女の子の中から、読み書きが一番確かな(それに一番かわいい)娘を選んで、校正係にした。非常に多くの人が仕事を求めて編集局を訪ねてきたが、その中からおとなしそうな大佐を選んで、記事を書かせることにした。記事の目的は、日本の占領軍の存在なくしては、ウラジオストクは滅亡すると証明することだった。(644–645)

ネスメーロフを新聞編集の仕事に誘った「リョオノスキ・イズミ」とは、和泉良之助(1871–1931)のことである。この人物については、桧山邦祐が著した伝記がある[7]。それによると、和泉は茨城県鹿島郡に生まれ、上京して二松学舎で学んだ。1898年に高等商業学校付属外国語学校の露西亜語学科に入学。同校は翌年、独立して東京外国語学校になったので、和泉は東京外国語学校の第二回卒業生となった。この学校で彼は二葉亭四迷(長谷川辰之助)に教えを受けた。1904年日露戦争がはじまると、二葉亭の推薦で乃木希典大将の従軍通訳を務めた。戦後に再び大陸に渡ってウラジオストクに住み、二月革命勃発後に新聞の創刊を企てた。計画が実現して『浦潮日報』が創刊されたのは、1917年12月9日のことであった。1922年10月に日本軍がシベリアから撤退し、その二カ月後に和泉は帰国させられたが、他の日本人によって『浦潮日報』は1930年まで発行されたことを、桧山が明らかにしている[8]。その間、ロシア語版の発行は、日本軍が「革命軍武装解除」を行った1920年4月から、1922年10月のシベリア撤退までの、大部分の期間続いたと思われる。

『浦潮日報』ロシア語版について、原暉之は次のように記している。

> 日本軍憲は武力の威嚇のほかに、『浦潮日報』という広報紙と浦潮居留民会という名の別動隊をもっていた。1917年12月に創刊された『浦潮日報』は「革命軍武装解除」の直後から特務機関長井染大佐の工作のもとにロシア語版をも発行し、軍との関係をますます密接にしていたが[……][9]

原暉之もこの記述に対する注で指摘しているが、「井染大佐の工作」については、ウラジオストクの特務機関で井染禄朗(1878–1930)の部下であった樋口季一郎(1888–1970)が、戦後に発表した回想記で触れている。「主筆と編集長」と題された約三頁にわたる章から、本稿に関係する部分を抽出して引用する[10]。

> 武装解除完了の数日後の夕刻。我が井染大佐は鼻頭に汗を浮かべながら愴惶として軍司令部より公館に帰り来り、「樋口、大変な問題が起った。お前に一つ大いに働いてもらいたい」と叫ぶのであった。[……]「今からロシア字新聞を発行するのだ。お前は主筆かな。編集長か

(7) 桧山邦祐『和泉良之助』サンケイ新聞生活情報センター、1981年。
(8) 同上、6頁。
(9) 原暉之『シベリア出兵:革命と干渉——1917–1922』筑摩書房、1989年、548頁。
(10) 樋口季一郎『アッツ・キスカ軍司令官の回想録』芙蓉書房、1971年、81–84頁。

な。いや両方を兼ねるというのが適切であろう。そして、おれは社長だ」という次第であった。

ウラジオストクの権力を掌握した日本軍は、現地のロシア人への宣撫工作として、ロシア語新聞の発行を企画したのである。主筆を命じられた樋口は、新聞が主張すべきこととして、「共産主義実行上の不道徳性」をはじめ五カ条を挙げている。

さて、実は樋口のこの活動とネスメーロフとの関わりは、樋口の回想記の中には見出すことができない。樋口はこの事業のスタッフについて、「大佐はこの難行完遂のため、私に与えた人的要素は、中尾君、スタヴロフスキー外ロシア人通訳一名、日本人通訳一名、タイピスト二名であった」と記している。中尾もスタヴロフスキーも、すでに特務機関で樋口と働いていた人々である。日本語のできないネスメーロフが、「ロシア人通訳一名」である可能性もない。日本軍の手で現地宣撫用ロシア語新聞を発行するにあたって、井染からその任務を命じられた樋口は、最初は浦潮日報の名を利用するだけで、編集から印刷まですべて自分で取りしきったと思われる。浦潮日報との関わりは、次の段階で生じた。再び、樋口の回想に戻ろう。

> この新聞名をやはりウラジオ・ニッポウと命名したのであった。開店後、三日目に一枚の小印刷物が出来上った。第二週目にしてやや新聞らしい体裁を整えた。第三週目に、隔日に小新聞を出すことが出来た。第四週目に入って小なりといえども日刊紙となり得た。一カ月にしてこの仕事の全部を邦字「浦潮日報」に移したのである。

一方、桧山邦祐の著した和泉良之助の伝記では、浦潮日報社は井染大佐の要請を受けてロシア語新聞を発行したが、「発行引受けに当たり、前受金として金一万円也が支払われた」とある。その金で石油発動機と露文用印刷機を購入したが、「まとまって軍からもらった金はこれだけで、あとは新聞紙代を、その都度支払いで受けとった」だけだと、関係者の記憶によって述べられている。つまり、まず井染大佐の命を受けた樋口大尉が主筆と編集長を兼ねて、特務機関の手でロシア語新聞を発行した。一カ月でそれを軌道に乗せると、浦潮日報社の和泉に事業全体を任せた。和泉はロシア語版の編集者としてネスメーロフを雇った。和泉の伝記、そして樋口とネスメーロフの回想から、以上のような構図が見えてくるのではあるまいか。

ネスメーロフの回想に従えば、彼と和泉良之助との出会いはあくまで偶然のものであった。この記述には、ある程度の作為が感じられる。ロシア語をよく解する和泉が、自分自身で適当な人材を発見したことは大いにあり得るが、ロシア人編集者の人選には、日本軍側にも思惑があって、候補者の経歴などを調査した上で決定はなされたであろう。だが、著作と縁のない人物に新聞を任せることは無理だから、現地の新聞に詩を発表したばかりの元白軍将校と出会って、和泉が目を輝かせたことは理解できる。「あなたが新聞で働い

てらっしゃることは、すばらしい」という和泉の言葉には、現実感がある。

本人の回想を信用するならば、ミトロポリスキーがネスメーロフというペンネームを使って発表した初めての詩が、彼を和泉との出会いに導き、この出会いが彼にウラジオストクで生きる基盤を与え、詩人になる土台をも築いてくれたことになる。「私は新聞社で最初の給料を受けとった。200円とちょっとだった」(647)と、ネスメーロフは書いている。彼は初給料を受け取った日に、いつも行くロシア人向けの食堂へ行った。昼食の値段は、当時すでに価値がなくなりかけていたコルチャーク政権の貨幣「シビールカ」で500ルーブリ、日本円なら30銭だった。支払いのとき小銭を探すネスメーロフのポケットから日本円の百円札が出てきたのを見て、食堂にいた大勢のロシア人はシーンと静まり返った。そのときの女たちの表情を忘れられないと、作家は回想している。ウラジオストク到着の際に手持ちの拳銃を売って、その代価の20円でなんとか生活しようとしていたネスメーロフにとって、浦潮日報からの給料は、この上なくありがたいものであったに違いない。

「ひと月かふた月経った。私は新聞に飽きてしまい、今はわが大佐殿の方がよけいに仕事をしていた」(647)という叙述がある。新聞への熱意を失った彼は(しかし仕事は続けた)、ウラジオストクの詩人たちと知り合って刺激を受け、本格的に詩作を再開する。軍人としての経歴しかなく、冬のシベリアを敗走した末にやっとウラジオストクに到着したミトロポリスキーに、浦潮日報はよい収入をもたらす仕事を与えた。それによって彼は、詩人ネスメーロフとして生きることが可能になった。元白軍将校は、日本軍占領下のウラジオストクで、こんな形で生き延び、詩人になったのであった。

2. 中ソ国境を越えてハルビンへ(1924年)

1922年10月に日本軍が撤退した後も、ネスメーロフはウラジオストクに留まった。市がソヴィエト・ロシアに組み込まれる際に国外に脱出した人の数は、夥しいものであった。原暉之は、「日本の撤兵期日が近づくと白衛派軍人、その家族、ソビエト政権に悪感情をもつ市民らは続々と国外に脱出した。その一部はポシェートから琿春・吉林を経て中国各地に散らばった。また、日本の保護を求めて元山港に殺到した難民の数は一万人に近かったという。日本政府が難民受け入れに厳しい条件をつけたため日本に永住できた者は多くない」と書いている[(11)]。小泉義勝は、「さまざまな浦汐脱出行」と題した論考で、スタルク提督が率いる船団に9,000人の難民が乗り込み、元山、上海、マニラへと苦難の旅をしたことや、六人の陸軍幼年学校生徒が10トンの船で太平洋を横断して無事アメリカの東海岸にたどりついた例などを紹介している[(12)]。

(11) 原暉之『シベリア出兵：革命と干渉——1917–1922』、570頁。

(12) 小泉義勝「さまざまな浦汐脱出行」『セーヴェル』15号、2002年、16–19頁。少年たちの太平洋横断は、亡命ロシア人社会で伝説的な偉業として語り継がれた。ネスメーロフはこれをテーマに、『大洋を越えて(Через океан)』(1934年)という長詩を書いた。*Несмелов*. Собрание сочинений. Т. 1. С. 383–391.

この大量亡命の動きに加わらず、ウラジオストク残留を選んだネスメーロフは、当初は唯一の非共産党系新聞『祖国の声』にコラムなどを書いていたが、やがてその新聞も閉鎖された。発表先はなくなり、糊口の道は閉ざされた。日本軍占領時代とは一変して、苦境に追い込まれたのである。当時の状況について、彼は次のように書いている。

> 冬になると僕はついに、湾を覆った氷に穴を開けてコマイを釣り、それで生活しはじめた。これはウラジオストクの「元白軍」の間で盛んだった職業である。氷上の僕の穴の隣人は、長い口髭を生やした老大佐だった。僕らは釣った魚を持ち帰りながら、ボリシェヴィキを罵り、毎月10日には皆でゲーペーウー(ГПУ)司令部へ顔を出し、そこで所在確認をされた。(657)

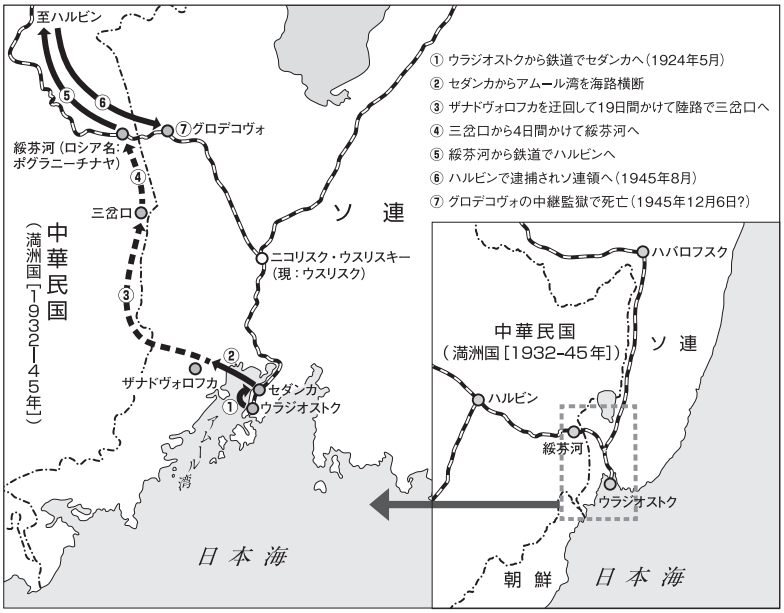
ソヴィエト政権下でのネスメーロフは、生業がない上に、国内移動も禁止される身となった。パスポートに「元白軍指揮官(Бывший белый комсостав)」というスタンプを押された人々は、所在確認のため毎月決まった日にゲーペーウー(国家政治保安部)の事務所に出頭することが義務づけられ、しかもウラジオストクを離れることは許されなかった。

一年半後、そんな境遇に嫌気が差したネスメーロフが亡命を思い立つと、やはり元白軍将校の三人の仲間が即座に賛同する。みな、ソヴィエト・ロシアでの生活が限界に達していたのだろう。彼らがめざしたのはハルビンである。中東鉄道建設の拠点としてロシア帝国によって中国領内に作られた街は、革命後も多数のロシア系住民を抱え、ロシア風の街並みの中、ロシア語で生活することが可能な場所だった。

ネスメーロフら四人は、1924年5月に国外脱出を計画した。ハルビンに流入した亡命者の数が特に多くて市のロシア人人口が10万人を超えたのは、オムスクのコルチャーク政権が崩壊した1920年と、日本軍が撤退して極東共和国がソヴィエト・ロシアに統合された1922年であった[13]。つまり四人は、十月革命後の亡命としてはかなり遅い時期に行動を起こしたことになる。密出国者の数が減少するにつれて、監視の目は行き届くようになり、国境を越える難しさは増大していたと思われる。ソヴィエト領内の移動を禁じられた者たちが密かに国境を越えるのだから、人に見られることを避ける必要があり、基本的にはタイガを徒歩で行く旅となった。国境警備隊との遭遇を避け、世界最大のトラであるアムールトラなど野生生物を避けながら、密林を行くのだ。ネスメーロフは『自分のこと、ウラジオストクのこと』、そして『われらのトラ』という二つの文章で、この脱出行について語っている。また、『赤毛のレンカ』(1935年)や『Le Sourire』(1931、フランス語で「微笑」の意)は、どちらもフィクションの体裁をとっているが、登場人物の越境ルートにはネスメーロフ一行の足取りと共通する部分がある。これらの回想記や小説をもとに国境越えのルート

(13) 中嶋毅「ハルビンのロシア人社会」松里公孝編、北海道大学スラブ研究センター監修『講座スラブ・ユーラシア学3:ユーラシア——帝国の大陸』講談社、2008年、271頁。

を表わしてみた地図を付す。詩人の回想からは、国境をどの地点で越えたか特定できないので、一部は推定したルートということになる。



ネスメーロフらは、道案内を頼んだアーンチクというロシア人と落ち合うために(14)、まずウラジオストク駅で鉄道に乗ってセダンカ駅まで行った。そこでアーンチクが調達してくる小舟を待った。

> ウラジオストクから16ヴェルスタ(15)ほどの地点にセダンカ駅がある。駅はアムール湾に臨んでいる。[……]セダンカからアムール湾の対岸までは、18ヴェルスタの距離である。もしも読者が沿海州の詳細な地図をどこかで入手して、アムール湾岸から南に広がる地域を見てくだされば、そこから中国との国境までは村が二つしかないことがわかるだろう。ザナドヴォロフカの南方は荒野である。その荒野はソヴィエト国境を越えて中国領にまで広がっている。(433)

アムール湾の向こうに広がる無人の地を行くために、一行はセダンカから中国人の船頭が漕ぐ小舟に乗って対岸へ渡った。アーンチクの知り合いの家で一泊して、翌日の早朝、各自が大きい荷物を担いで出発した。20日以上を要した徒歩の旅のはじまりである。密林

(14) アーンチクも元白軍将校だったが、ゲーペーウーでの登録や毎月の出頭などの義務をまったく果たしていなかったので、ソヴィエト政権下では不法滞在者だった。彼はアムール湾対岸から中ソ国境まで行く道を知っていると告げたので、道案内として雇われた。実際には彼が道を知らなかったために、一行は何度も道に迷う結果になった。酒も茶も飲まず、食べ物にだけ関心のある、道を知らぬ道案内アーンチクの存在は、困難に満ちた脱出行に、いかにもロシア的な喜劇性を与える要素となっている。

(15) 1ヴェルスタは1.067km。

の中を行き、食事時には焚火で黍（きび）のカーシャを作る。すぐに煮えるそのカーシャが、道中の主な食糧である。ザナドヴォロフカ村の手前で谷間に入り、村を迂回する。途中で会った朝鮮人の農夫から、最近トラに襲われて負傷したことを教えられる。結局ネスメーロフ一行はトラに遭遇することはなかったが、回想記の少々いたずらっぽい題名「われらのトラ」が示しているように、当時この地方には多くのアムールトラが棲息していたので、山中でトラに襲われる恐怖は、彼らの脳裏を去ることがなかったようである。自然条件は過酷で、険しい山道の登攀や、体の芯まで冷える渡河が繰り返された。

歩きはじめて数日後に、中ソ国境を越える日がやってきた。険しい坂を上って一行が小さな台地に着いたとき、もう太陽は沈みかけていた。各人が座って休息を取っていると、少し向こうの黒ずんだ柱に興味を持って見に行った仲間が、「みんな、俺たちは国境にいるんだ。来てみろ！」と叫んだ。全員が即座に駆け寄ると、柱の上部に幅の狭い板が打ちつけてあって、その板の右端にロシア語の活字体で「ロシア」、左端に「中国」と書いてある。一行はそれを見て、今こそ祖国を捨てるのだと実感し、さまざまな思いに駆られて、しばし立ちつくす。

> あちらで、何が我々を待っているだろう。最初に出くわした中国の兵士に拘束されるんじゃないか。匪賊に捕われるんじゃないか。これが一番恐ろしいことだが、中国当局が我々をボリシェヴィキに引き渡すんじゃないか。(694)

心は揺れ動くが、すぐに「この最後の一歩を踏み出せば、あとは何もかも運次第だ」と考える。すでに選択はなされ、引き返すことはあり得ない。だからこそ、「長い送別は余計な涙のもとだ。みんな、行くぞ！」という仲間の声で、全員がすぐに立ち上がるのである。この後、一行は中国領に入り、なおも続く密林を三岔口（サンチャコウ）めざして歩いた。時おり、中国人や朝鮮人の住む小屋や小集落を見かける。何日もかけてやっと密林を抜けた地点で、一軒の小屋に入って食事を注文して、久しぶりに熱いスープを味わった。そこに突然、中国の警官が現れて「逮捕する」と叫んだので、一行は仰天する。結局この警官は賄賂が目当てであることがわかり、要求された60ルーブリを10ルーブリに値切って支払い、事なきを得る。この警官との交渉を手伝ってくれたのは、ブロークンではない正確なロシア語を話す朝鮮人であった。彼はロシア正教の聖職者で、ウラジオストクの主教の堂守を務めていたという。国境地帯には、このように思いがけない背景を持つ人物や、秘かに国境を越える密輸商人が存在している。荷を山ほど積んだ馬を囲むようにして、無言で山中を進む朝鮮族の密輸商人の一行に出くわしたこともある。酒やタバコ、布地をソ連領に運んで売り、一儲けしようというのである。ネスメーロフの回想記は、激動の時代の国境地帯でしたたかに生きる人間たちを知る楽しみも与えてくれる。

アムール湾岸から三岔口まで、19日間かかった。最後の数日間は朝鮮人の道案内について歩いたのだが、三岔口に到着したときは、全員が疲労困憊の状態だった。だが三日ほど休息して、最後の行程(「これまで以上に身を潜め、もっと徹底的に身を隠して、夜間に歩く必要のある行程」)に出発する。綏芬河(スイフンホー)までの70キロ以上の道のりである。

> 私たちは夜に歩いた。馬賊がうようよしている土地だったので、道路は夜になると人気(ひとけ)がなかった。番犬の鳴き声が聞こえると、山に入って遠回りした。こうして四昼夜が過ぎた。ついに山の上から、ポグラニーチナヤの電気の光が見えた。(450)

ネスメーロフの記述は、小説でも回想記でも、綏芬河に到着するところで終わっている。綏芬河はハルビンに通じる中東鉄道の中国側の起点であり、駅はロシア語ではポグラニーチナヤ(国境駅)と呼ばれていた。ネスメーロフらは、なんとか無事に国境を越えたら、綏芬河から目的地ハルビンまでは鉄道で行くことを予定していたと思われる。ウラジオストクから綏芬河まで20日以上かけて歩き通した一行は、その二倍以上の距離がある綏芬河とハルビンの間をどんな気持ちで汽車に乗って行っただろうか。今のところ、それを示す記録はない。

おわりに——ネスメーロフの死(1945年)

ウラジオストクを脱出してたどり着いたハルビンで、ネスメーロフはそれ以後21年間生きた。彼はこの地で文学的才能を開花させ、多くの作品を残した。ヨーロッパの亡命系雑誌にもソ連の雑誌にも寄稿し、ハルビンが満州国の領土になると、日本寄りの雑誌にも作品を発表した。フリーの文筆業を成り立たたせるために複数のペンネームを使って書きまくり、生活のために広告文なども書いた[16]。日本の支配を嫌って上海などに移る亡命者が増えても、ネスメーロフはハルビンに留まった。ウラジオストク脱出の時期が遅かったことからも感じられるが、この詩人は人生の岐路において、最初は祖国ロシアに留まることを、それがかなわなくなった時はロシア的環境に留まることを選択し、その選択に対して忠実に生きたのだろう。

1945年8月ソ連が満州国に侵攻して、8月20日ハルビンは赤軍に占領された。まもなくネスメーロフはスメルシュ (СМЕРШ)[17]に逮捕されて、ソ連領まで列車で連行された。21年前の徒歩の逃避行と反対に、中国側からソ連側へと中ソ国境を越えたのだが、今回は自

(16) ハルビン時代のネスメーロフについて、松村都は次のように記している。「ハルビンではただ一人、文筆のみで生計を維持していた実力派である。その代わり、広告文からアマチュア詩人の詩集のアレンジまで、お金になる文筆の仕事は何でも手がけ、特に医者は払いがいいので、医者の広告文は喜んで引き受けたという」。松村都「ハルビンのロシア人作家たち:1925–1945年を中心に」中村喜和、安井亮平、長縄光男、長與進編『遥かなり、わが故郷(異郷に生きるIII)』成文社、2005年、131頁。

(17) «Смерть шпионам»(スパイに死を)。ソ連で第二次世界大戦中に創設されたスパイ取り締まり機関。

分の意思ではなく、捨ててきた国ソ連の意思による越境だった。国境近くのグロデコヴォの中継監獄に収容されていたが、ある夜、おそらく血管系の発作に襲われて病死した。研究者の照会に対するロシア連邦検察局からの回答(1998年2月24日付け)には、ネスメーロフは「1945年11月1日に反革命行動の容疑で逮捕された。逮捕地は不明。1945年12月6日に戦争捕虜のための病院で死亡した」[18]と書かれていた。逮捕の時期はもっと早くて8月だったという説もある。また病院には搬送されず(看守たちは同房の囚人たちの要求を無視して、医師を呼ぶこともしなかった)、発作を起こした夜に監房で亡くなったと、生き延びた同房者たちが証言しているので、この回答の記載をすべて信じるわけにはいかない。しかし、やはり同房者の証言などから、死亡が1945年12月のことであったのは確実と思われる。裁判が開始される前に亡くなったので、名誉回復もされていない。

ネスメーロフが収容された中継監獄のあったグロデコヴォは、現在では「ポグラニーチヌイ」という名の地区に含まれている。「ポグラニーチヌイ」とは「国境地域」を意味するロシア語である。ウラジオストクを脱出したネスメーロフが仲間とたどりついた中東鉄道の駅「綏芬河」は、ロシア語では「ポグラニーチナヤ」(国境駅)と呼ばれていた。地図を見るとすぐにわかるように、綏芬河とグロデコヴォは、間に国境をはさんで非常に近い距離にある。ネスメーロフは1924年に中ソ国境を越えてハルビンで生き延び、21年後に逆方向に国境を越えて死んだ。ハルビンの亡命詩人の生と死は、深く国境と結びついていたのである。

(18) *Евгений Витковский*. Формула бессмертия; *Несмелов*. Собрание сочинений. Т. 1. С.5.